

令和5年度第2回岡山県総合教育会議

日時：令和6年1月19日（金）13:10～13:50

場所：岡山県庁3階 第1会議室

【総合政策局長】

それでは定刻となりましたので、これより令和5年度の第2回岡山県総合教育会議を開催いたします。

議事進行につきましては、議長である知事にお願いします。よろしくお願いします。

【伊原木知事】

本日は、大変お忙しい中、お集まりいただきましてありがとうございます。

本日のテーマは「長期欠席・不登校対策」についてでございます。本県の長期欠席・不登校対策については、スクールソーシャルワーカー等の専門家、専門機関と連携した支援や、教室以外の居場所を確保するための別室支援員の配置拡充など、重点的に進めておりますが、不登校児童生徒数は、全国と同様に増加傾向にあるため、引き続き、個々の状態に応じ、具体的な支援策を講じる必要があると考えております。

本日は、県の現状と今後の取組についての説明に続き、赤磐市立磐梨中学校川上校長先生にもご出席をいただき、学校での別室指導についての実践発表をしていただきます。

長期欠席・不登校対策の課題や来年度の取組等について、忌憚のないご意見をいただきたいと考えております。

それでは、現状と今後の取組等について説明をお願いします。

【人権教育・生徒指導課長】

失礼いたします。人権教育・生徒指導課です。よろしくお願いいたします。

資料の1ページをご覧ください。

まず、国の動向ですが、近年の不登校児童生徒の増加を受け、昨年3月、不登校対策の方針を「COCOLOプラン」として打ち出しました。しかしながら、令和4年度の調査結果において不登校者数が過去最高であったことから、「不登校・いじめ緊急対策パッケージ」を打ち出し、「COCOLOプラン」を前倒しにして取組を推進するよう、求めています。

2つ目の本県の状況についてであります。令和4年度の1,000人当たりの不登校児童生徒数の出現割合は、小中学校で全国平均を下回り、高校においても全国とほぼ同程度と、一定の成果は見られます。しかしながら、不登校者数自体は、全国と同様に増加の傾向であります。

こうした中、来年度、県教委を挙げてさらなる不登校対策に取り組むこととしており、当

課を中心に、2ページに示させていただいている方向性で取り組んでいきたいと考えております。

まず、令和6年度の新規の事業としては、(4) 高校進学を目指している不登校の中学生を対象とした教育支援センターを県立高校内に設置。また、(5) 人と関わるのが苦手な児童生徒に対し、社会的自立へのきっかけとして、オンライン上に新たな居場所を確保すること。(6) 一人ひとりの小さな変容を見逃さないよう、1人1台端末を活用した心の健康観察を実施すること、としております。

併せて、新たな不登校を生まないことを目的に、(7) において、学校自体も授業や学校行事などのあらゆる場面を活用し、自己存在感や充実感を感じられるよう、積極的にさまざまな取組を推進することとしております。

国が特に重要視している多様な学びの場の確保の中心となる校内教育支援センターについては、本県では、国に先駆けて、令和元年度から、(1)の「心の居場所推進プロジェクト」において、実践しているところであります。令和5年度については、(2)の「小学校におけるシステム化推進事業」における「自立応援室」も含めると、小学校で59校、中学校で33校において、県事業で実施しているところであります。自立応援室利用者の約9割で、改善もしくは現状維持できている状況であることから、令和6年度については、自立応援室の設置をさらに拡充していきたいと考えております。

本日は、この後、実際に自立応援室を運営されている赤磐市立磐梨中学校の川上校長先生に、現状並びに成果と課題についてお話しいただける運びとなっております。川上校長先生、どうぞよろしく願いいたします。

【川上校長】

赤磐市立磐梨中学校の川上と申します。よろしく願いいたします。

我が校では、自立応援室、別室のことをハッピールームと呼んでおります。今日は、その運営の成果と課題についてご説明ができたかと思います。限られた時間なので、若干駆け足の説明になりますけどご容赦ください。

まず、磐梨中学校では、令和3年度から取組をスタートしておりまして、今年度が3年目ということになっています。当初は、市教委のバックアップの非常勤職員を配置いただいたことでスタートしまして、今年度からは、県教委から加配をいただいて、常勤職員を配置いただいております。感謝しております。そのおかげで、いろんな取組も進んできたかなというように思っています。

このハッピールームの様子ですが、うちの学校では、大体教室の半分ぐらいのスペースで、ちょうど奥の窓を見ていただきますと、南側から暖かな明るい日差しも入ってくる場所で、とてもいい場所ではないかなと思っております。

それから、卒業生の作品もありますけど、少しでも子どもたちの足が向いてくるように、温かな心の居場所になるようにということで、このような掲示にも心がけているところで

ございます。また、近くに、吉井川がございますので、吉井川に出かけて行って取ってきたメダカを、みんなで責任を分担して飼いながら、ここで生活をしています。

特に今、受験前になっていますので、学びに集中したいときには、こういったパーソナルスペースを確保しながら取組を進めているところでございます。

このハッピールームなんですけど、生徒、保護者に周知することで利用が進んでいったらいいなということなんですけど、まずはその広告塔になるのが職員ですので、必ず年度の初めには、かなり時間を取りまして、教員一人ひとりが、きちっとハッピールームがどんな部屋なのか、説明ができるようにということで、例えば運営についてとか、利用の手引きという教員用のものを使いながら確認をしております。

また、これが児童や生徒用の、そして保護者用のパンフレットになっていますが、我が校のハッピールームってどんなところなのかなという、キャッチフレーズは2つでございまして、1点目は、「自分で決めて自学自習を行う場所」としてございまして、自分で決めてというところがまずポイントです。もう一点は、「心のエネルギーを充電できる場所」という形で説明をさせていただきながら、保護者等にも説明をしています。

常勤職員を配置していただいたおかげで、夏休みには、管内の小学校に職員が出向きまして、今までだったら、このパンフレットを置いてくるだけだったんですけど、小学校の職員も中学校の職員と同じ説明ができるように、しっかりと時間を取って説明をさせていただいております。今回、入学前に3名の保護者とお子さんが、実際に、この自立応援室を見学に来るということもありましたので、少しずつ取組が進んできたかなと思っております。

過ごし方ですが、少しでも保護者にどんな学びが進んでいるのかということで、「今日の足跡」には、子ども自身が書いておりますが、下に教員・支援員よりと書いている欄をつくりまして、そこで出くわした支援員が、今日の1日の様子を今までは伝えていたんですけど、最近は、担任の教員もよく来るようになりましたので、担任の教員もそれに添えて一言コメントを書いて、保護者に知らせるような工夫をしております。

運営に当たっての6つの工夫ですが、まず環境整備につきましては、星の4つ目ですけれども、本当に通ってくる子どもの姿というか、実態はさまざまですので、3年間の中でも何度もレイアウトを変えまして、今年度も3回変えました。今までは、ワイワイガヤガヤと友達と話をしたいな、それでハッピールームに通ってきている子どもが去年だったんです。今年は、自分のペースでやりたいということなので、かなりパーソナルスペースを充実させてきているような状況です。

それから、目標としては、学校復帰、教室復帰という目標を掲げておりますので、一番最初の入り口のときに、特にそのことを意識しながら、だんだんとルールがないがしろになってこないように取組を進めています。特に、目標設定シートを自分で決めて、最初1日のスタートは、ハッピールームに入ってきたら、自分で今日の1時間目はどんなことをしようかなと、今日、僕は4時間目で帰るということも含めながら、これが最初はできなかったんですけど、どんどんと自分で計画を組むと、その時間を上手に使える子どもたちの姿が見えて

きているので、それはとってもいいことかなと思っています。

ちなみに、これが目標設定シートです。最初、これを仰々しく準備したんですけど、いきなり「最終目標は」というのはハードルが高いので、今は、「1学期は」とか、「何月までは」みたいな形で、短期で目標を作るような工夫をしているところです。

それから、中学校の出口として、やはり進路の問題はとても大きいですので、興味を持ったことがあったときには、これは親子で参加していますが、高校の先生が直接、このハッピールームにお越しただいていろんな説明をしてくださいます。これがとても学びのモチベーションが高まってきて、自己決定しながら学びに向かっていくいいきっかけになっているかなと思っています。

また、ややもすると、実習とか作業とか、そういったことが多くなったり、自分の趣味の時間を過ごすことが多くなるんですけど、少しでも学びに向かうようにということで、幸いにして、今、タブレットが入ってきましたので、これを上手に使いながら、学びに向かっていくように頑張っています。

ちなみに、今まで、行事の日というのは、結構子どもが休んでいたんですけど、今はこの教室で、タブレットを使ってオンラインで文化祭の様子とかも全部見えますので、むしろ行事の日の方が登校できて、支援員がタブレットを持って、「次、もっと右の方に行って」とか、結構子どもとキャッチボールをしながら、少し様子を知らせるような取組も行っております。

ここに通っている生徒が増えてきましたので、今4名の体制で対応していますが、子どもが増えてくると、子どもの実態をしっかりとつかんで、同一歩調で指導、支援することがとても求められますので、今は、毎週火曜日に必ず1時間、子どもの定期的な情報交換会を持つようにして取組を進めております。

これがタブレットを使って勉強している様子です。ちょっと注目していただきたいのは、実は、今この机を使っている生徒なんですけど、技術の時間にラジオのキットを作るということで、それを一生懸命ここで組み立てていたんです。それがきっかけになって電気に興味を持ちまして、今、第2種電気工事士の資格取得にチャレンジしています。なかなか中学生で持っている子はいません。頑張りまして、50問のテストで6割取ったら合格するんですけど、80点取りまして、ペーパーは合格して、現在実技試験を受けて結果待ちです。発表が来週の25日、ちょうど私立の1期の入試なんですけど、ドキドキする日と楽しい時間が混在しています。

ただやっぱり、教科の学びの中で、自分でやりたいこと、個別最適な学びじゃないですけど、そういうものを見つけた子どもの学びというのは、ちょっと理科の計算の問題が分からないので、理科の先生を呼んでほしいとか、時には体を動かしたいので、みんなでダンスするので体育の授業を組んでほしいとか、子どもの方から教員の方に、今要望が上がってきているので、今までは、どちらかという居場所を確保していましたが、学びにも少しずつつながってきたかなと思っています。

それから、右のところは、子どもにもボードを渡しておりまして、自分の今の気持ちを絵に表したり、文字に書いたりするんですけど、どこから見つけてきたか分かりませんが、なかなか教室の中で孤独感を感じた子ですけど、「思いっきりやらなきゃ、貴方の人生ゲームオーバー」と書いていました。どこかでやっぱり仕切り直したいという気持ちが表れていて、この言葉を見るたびに、支援に関わっている教員も支援員も、何とかこの子を教室に復帰させないといけないなという気持ちを強くしているところがございます。

今3年目ですので、実際に利用している子どもたちにどんなふうな成果が上がっているかということ、簡単に説明させていただきます。

初年度は、利用生徒は8名いました。3番目の成果と課題のところを見ていただきますと、3年生が2名いましたので、2名が高校へ進学、4名が教室へ復帰しました。2名はハッピールームの継続ということになっています。初年度ですから、かなり試行錯誤しましたが、子どもたちの居場所としての機能は果たせましたが、支援員だけの取組だったので、学びの充実というところは、少し課題があったのかなというふうには思っています。

令和4年度、2年目です。昨年になりますが、利用生徒は12名いました。ただこの12名の中には、昨年教室復帰した4名、ほとんど教室で過ごしているんですけど、時々カームダウンするためにこの教室を利用することがあるので、籍だけ置いている子もいます。だから、ちょっと数が増えています、ただいずれにせよ、多かったので、支援員の情報交換会を定例化したのが、この年からでございます。また、高校の説明会を始めたのも今年度で、12名のうち3年生が8名いましたので、学びの充実は、かなりの教員が空き時間にここへ来て授業をするようなこともあったと思います。

3番の成果のところにつきましては、3名がこの年初めて県立高校へ進学、それから5名が私立高校へ進学しまして、1名が教室復帰、3名が継続してハッピールームを利用しています。ここで、何か逆転現象が起きているんですけど、学びの体制はかなり充実してきたんですけど、数が多くなってきたので、ワイワイガヤガヤする場面もありますので、子どもたちにとっては、居場所としての機能は、ちょっと利用しづらくなってきている子も出てきて、痛しかゆしの部分もあったかなというように思っています。

そして、今年度、3年目ですけど、スタートは3名からスタートしましたが、今、現時点では、各学年2名ずつ、計6名が利用しています。今年度の特徴は、とにかく自分で静かに自分の学びを進めていきたいということで、ガラッとレイアウトを変えまして、子どもたちの特性やニーズに対応したパーソナルスペースを、効果的に活用した取組をしています。

今年度は、常勤職員を入れてくださったおかげで、かなりいろんな動きが進みまして、3年目にして、本当に担任や学年団や教科の授業の先生方が、これだけ授業の合間に来てくれるというのは今まであまりなかったことです。やはり教えた子どもたちが伸びていく姿を見ると、教員の励みにもなりまして、実は、2年間ほとんど登校することができなかった生徒が、今年は今、欠席が20日ぐらいで収まっています。この調子でいってくれたらと思うんですけど、この間、実施したテストでは81点取りましたので、かなり本人も頑張っ

いますけど、個別に指導していくと、そういった結果も出てくるのかなと思っております。

運営に当たっての所感でございますけど、我が校には、県外の学校も含めて視察に来られることがあります。皆さん、どんなハッピールームというか、どんな自立応援室の型にしたらいんだろうかということばかりを聞かれるんですけど、様子を見ていて、当たり前のことですけど、型はなくて、子どもの実態はさまざま、フレキシブルな対応をしていかないといけないというのは本当に感じます。この写真を見ていただきますと、1年前はこんなレイアウトです。12名です。ここで友達と話をしていることが楽しみで来ている子もいるんですけど、勉強したい子もいて困ってました。今年度は、かなり個別のスペースを準備しながら、時々隣部屋を使いながら、友達とクリスマスリースを作ったりとか、いろんなことをしていますが、こういった状態で、レイアウトだけではないですけど、フレキシブルな対応が求められると感じています。

それから、もう一点感じていることは、子どもたちにとって一番の最初の関門は、自分で1日のスケジュールを決めないといけないことなんですけど、でも実は、これがとてもよくて、自己選択し、自己決定をして、子どもたち自身が1日のコーディネートをしたら、子どもたちは何も言わなくても、結構学びに向かっていきます。次の時間は自分で休憩して、自分の趣味のパステルアートを作ったりとかしていますけど、これがとてもいいなと思っています。

どんな学びをここで仕掛けていかないといけないのかなと、ずっと考えながらハッピールームを運営していますが、今私が感じていることは、ハッピールームで学習の個性化が実現できて、学びが進んでいって楽しんでいる輝いた姿を見ていると、この姿を通常学級でどれだけできるんだろうかなということが大きな課題で、それが進めば、ハッピールームを利用する生徒も減るし、ひいては長期欠席や不登校の生徒が減ってくるのではないかなと。これはとても難しいことなんですけど、今うちは大きな壁にぶつかっておりまして、ハッピールームの学びを何とか、個別的な学びを、通常学級でやっていきたいなというように感じています。

最後にちょっと長くなりましたが、利用している子どもたちの感想を紹介します。「息抜きできる場所」、「温かくて楽しい場所だ」、「この（ハッピールームの）おかげで学校に来れるようになった」、「好きな時間に来れるから、学校自体に来やすくて、自分のペースで勉強ができるよ」と、言っています。ある程度、居場所としては機能してきたのかなと思っています。

後輩に向けてアドバイスがあるかということなんですけど、やっぱり一番に言うのは、「来たらずいぶん自分で今日どうするか決めるんだよ」ということ。これが、子どもたちが次の後輩たちに伝えたかったことだろうな、と感じています。「つらくなったら、迷わず来てもいいところだよ」「そこでつらいことを半分こしてください」というようなメッセージも伝えています。

こういった作業の場面もあるんですけど、しっかり学びも充実させながら、少しでも学校

復帰や教室復帰がかなえられるように、これからも取組を進めていきたいなと思っています。ご清聴ありがとうございました。

【伊原木知事】

ありがとうございました。お疲れさまでした。

それでは、皆さまには、不登校対策についてどういった取組に力を入れていくべきかなど、ご意見をお聞かせいただけたらと思います。川上校長先生への質問に充てても構いません。今日は、時間がタイトな設定になって20分で意見交換しないといけないということになってますので、テキパキいきたいと思います。

【教育委員】

とてもいい取組でありありがとうございました。私自身も、今、週に1回、別室支援員として行っているんですけども、やっぱりちょっといろいろと難しいこともありまして、今おっしゃられたように、今日1日の目標、目当て、スケジュールを自分で決めさせるという取組もすごいなと思いました。私が行っているところは、いろいろ家庭の事情もありまして、学校には来ているんですけど、それから先の学力の学びになかなかつながらないというか。先ほど言われていたように、空き時間があるときは先生が来てくださって勉強を教えてくださいとか、本当にそういうこともしていただけると、なかなか私達だけでは、勉強とかも教えられないところもあるので、学力保障という意味ではすごくいい取組だなと思いました。

そういう形で、担任の先生が気に掛けて来てくださることだけでも、子どもたちですごく励みになるし、ちょっとほっとかかれてるんじゃないかなという気持ちになる子どもさんが結構多いんですね。自分一人だけで、その日は担任の先生も来てくれないということがあると。なので、そういう形で、いろんな学校の先生やこういう支援員が関わっていくことが、その子その子に寄り添っていけることなのかなと思ったのと、先ほどもおっしゃられているように、その子たちと支援員、家庭だけではなくて、やっぱり通常のクラスの子たちが、自分のクラスに不登校で来られない子どもたちがいることを、自分たちがどのように受け止めているか。自分たちも一緒になって、もし自分もそうなるかもしれない、そういうふうに通常クラスの子どもたちも、みんなと共有していける、いくつということもとても大事なのかと思ひまして、今日は本当にとっても素晴らしい取組をお聞きいたしまして、参考にさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

【教育委員】

どうもありがとうございました。学校教育の場でこういう取組をしているということ、やはり地域の方々であったり、社会にも伝えてほしいと思います。何も不登校であったり長期欠席というのは、学校だけの問題じゃなくて、家庭の問題もあれば、地域での問題、複雑化している社会の問題というようなことも大いにあると思うので、ぜひこういった取組、学

校ではこうやっているんだけどというようなことを、我々、大人社会がより地域の中へ発信をするような仕組みをつくっていかないといけないんじゃないかなというふうに思っていますし、地域の方々もご協力いただいていると思うのですが、理解をしてもらうというようなことはやっていかないといけないんじゃないかなというふうに思っています。

さっき、目標管理シートを見せてもらったのですが、今、世の中の子どもたちが、みんな大谷翔平君ばかりだったらすごいことになるんだろなって思うんです。大谷君のマンダラチャートを見させていただいて、81のブロックに分けたそれぞれの目標作りって言われたときに、16歳の子どもがこんなに夢を持って、こんなに目標を持って、そしてそのことによって、何もスポーツ界だけでやろうとしているのではなく、人間性としてどうあるべきかとか、道徳はどうあるべきなのかというような視点で作っていらっしゃる。私はもうちょっと、作るのには手遅れなのかもしれないなというふうに思うのですが、我々、県とすれば、夢育を前面に出して取り組んでいる中に、今日説明を聞いた中で何がうれしいって、じゃあ電気工事士になろうかっていうような、そこに夢を見出し出していける教育というんですかね。それがひいては社会に出ている糧になるというふうに思うので、素晴らしい説明を聞かせていただいたんじゃないかなというふうに思っています。何が言いたいかというところ、こうやって取り組んでいることを、ぜひともっと社会に発信したり、我々、経済界にも発信していただけて、一緒になって解決していくというような体制を組んでいけたらと思います。

【教育委員】

今日はありがとうございました。最後の先輩から後輩、後輩から先輩に伝えたいことというところを見ていますと、息抜きできる場だよとか、しんどいとかつらいときは駆け込むべきだよという直のメッセージを聞いて、大分、子どもたちは余裕がないといいますか、ストレスで息が詰まっている子が少なくないんだなということを確認することができました。そういった中で、今日お話に出たハッピールームというのは、大分、大人が子どものことを考えた、子どものための空間であって、大人たちがそれをちゃんと考えられていて、素晴らしいなというふうに思いました。

昨今、子どもの声がうるさいから公園をなくそうとか、子どもの居場所、コミュニティがどんどん大人の都合によってなくなってきているという事実も無視できないんじゃないかなということも考えましたし、そういうさまざまな居場所をこれからつくってあげてあげる必要があるのではないかと思います。

あと、その居場所で、じゃあ何をするか、どうしたらいいのかというところは、やはり子どもたちが本当に幸せそう、楽しそうにしている状況をしっかり観察すべきだと思うんですけども、時間を自由に使ったり、好きなものとかことに集中して活動できているという、先ほどのラジオキットの話なんかを聞いて、そういう場、時間をつくってあげてほしいんじゃないかなと思います。

僕も父親として、どうしても子どものことを将来志向で考えてしまうんで、いろいろ先回りして口うるさくなくなってしまうことがあると思うんですけども、それは確かに必要なんですけども、子どもたちにとって今できること、今楽しいこと、今が充実しているということが、もう一方ではすごく大事なのではないかなと思います。そういう場、そういう時間、別室とかオンラインとか、いろいろあるとは思いますが、そういう場を、コミュニティーを、もっともっとたくさん、多様化していますので、つくっていったらあげるといふ活動が、対策になるのではないかと思います。よろしくお願いします。

【教育委員】

本当にありがとうございました。大変勉強になりました。

私、お話伺っていて、このハッピールームが、いわゆる異年齢交流の場所にもなっていて、そして、指導教員が今年度常勤になったということもすごく大きいなと思ったんですね。教室に入れない自分というのは、恐らく自己肯定感がすごく下がっていると思うんですけども、そういった子どもたちが行っても受け入れてもらえるとか、そこに常駐している先生がいつも受け入れてくださる。どんな自分でも受け入れてくださる。あとすごいのは、先輩から後輩への指導じゃないですけど、これもすごいなと思って。自分のちょっと上の先輩が言ってくれる言葉って、大人から言われることよりももっと素直に聞けるところがあるかと思うんですけども、そういったところからの助言があったり、あるいはその先輩の進路とか生き方を見て、自分もちょっと頑張ったらこんなふうになれるかもしれないという見本にもなるというのが素晴らしいなと思いました。

それから夢育ってありますけど、やっぱり夢がない子どもたちにとってはなかなか難しい。けれども、その夢を育む場所、環境を先生方が提供しておられるというのが、これまたすごいなと思ってですね。理科のラジオにじっくりとそれだけに取り組ませるなんて、なかなか普通の教室ではできないことを丁寧にされたというのが、その子にとっての人生の大きなプラスになったんじゃないのかなと思うんですよね。ぜひその子に教員になっていただいて、将来は不登校の子どもの対応をしていただけたらいいなと思うんですけども、何かそういった取組が、もっといろんなところで広がったらいいなとすごく思いました。

ちょっとお尋ねしたいのが、常勤の先生が、今お一人おられるわけですね。残り数名の先生がおられるかと思うんですけど、どういう時間帯のシフトというか、何か担当とか決めておられるかどうか、ちょっと知りたかったんですが。

【川上校長】

子どもの担当みたいなのはあえて決めていません。いろんな大人に関わることが、子どもたちが変化していくことだと思っているので。常勤職員以外の職員は、週 26 時間勤務です。ちなみに常勤職員も兼務を 1 箇所かけていますので、実は、5 日間のうち 4 日間しかいません。それでも定期連絡会を行うことによって、1 日常勤職員がいないときでも何とか回して

います。支援員は、教員と同じぐらいの動き、子どものことを本当によく分かってきています。通常の学級や特別支援学級にも支援に行っていますので、ハッピールームを利用して生徒が、通常の学級へ戻りたいと言ったときに、その学級の状態が分かっている支援員と一緒に入っていくと、生徒は安心できるんです。また、常勤職員、元校長なんですけど、その常勤職員の切り回しもとてもうまいんだと思います。何とか今やっていますが、もうちょっと数が増えたら本当はいいなと思いますけど。

【教育委員】

なるほど、増やしてほしいそうです。ありがとうございます。

【教育委員】

話を聞いて、通常学級でこの個別最適な学びを充実させる、これが本当に一番のポイントかなと思いついて聞いていました。逆に言うと、普通の学級では、個別最適な学びというのは、今掲げられていますけども、まだスタートしたばかりで、これをどうやってやればいいのかというので非常にとまどっているんだと思う。このノウハウを、いかにしたら通常の学級に持ち込めるか。通常の学級だと、なかなか子どもが自分でやること決めてというのがなくて、先生がすべてこの時間割、そこに適応できない子が、やっぱりかなりいるのかなと。個別最適な学びをどのように通常学級でやったら実現できるかというのが、ある意味でいうと、このハッピールームを使いながら、ここをモデルにして通常の学級でできるようにするというのが、県教委とすれば一番重要なテーマではないかなというのを、話を聞きながら思いました。

【川上校長】

おっしゃられるとおりで、なかなか難しいことですが、取組は進めていけたらなというように思っています。

【鍵本教育長】

私はもう少し大きな話として、不登校がこれだけ、日本国中の学校で、岡山県だけの問題じゃなくて、岡山県はむしろ全国平均よりも少なく出ているんですけども、増えている原因は何だろうかということはずっと考えているんです。ある大学の先生と話をしたときに、不登校の子どもがこんなことを言ってくれましたという言葉があつて、どんなことを言ったかというと、「学校というところは、やらなきゃいけないこととやっちゃいけないことしかない」と。何がないかということ、やりたいことができないということが言いたいんだろうと思うんです。それが私はすごく心の中に残っていて。

結局、先ほど委員もおっしゃったように、学校というところが、もう学制が発布されて150年たつて、ある意味、制度疲労を起こしているんだと思うんです。日本型の学校教育という

のは確かに成果を上げてきているんですけども、それは何なのかというと、これまでは、みんながどの子も同じことが同じようにできるようにやってきたのが日本の学校教育なんですけども、さっきの不登校の子が言ったように、やりたいことができないというやはり課題が出てきて、それが一つ制度疲労だと思います。多くの子は、それにうまいことやってるんですけども、できない子が出てきたということが、不登校が増えている原因かなというふうに考えていて。

ですから、まさに通常の学級の中でどういうふうにしていくのかが重要だと思っています。一つは、子どもたちの、個別最適な学びというと難しいですけども、一人ひとりのやりたいことが実現する。言い方を変えると、教師が全部やっちゃうんじゃなくて、子どもたちに任せるような授業をしていかないといけない。子どもたちに、さっきも話が出てきましたけれども、要は決めさせる、自己決定ということがありました。自分で決めさせて、これあなたが決めただから、あなたの責任なんですよという自覚を持たせていくということ。1日のスタートに、自分の今日やることを決めさせるということはとても大事なことだというふうに思うんですけども、子どもたちは、学校に来て帰るまで、自分で決めなくていいことばかりじゃないですか。口開けて待っていたら、先生が全部言ってくれて、それをひたすらノートに書いて帰っているだけなので、そういう学校のスタイルを変えていかなきゃいけないというふうに思っていて。不登校の総合対策は、不登校の子どもたちの居場所を確保し、もう一方では、普通の学校をどう変えていくかということをやっているかと、多分減っていかないんじゃないかなというふうに考えています。

【伊原木知事】

ありがとうございます。いや、不登校の問題、本当に大きな問題ですけども、なかなかこれだけ頑張っているのに、まだまだ増えているということで、どうするか、大きな課題だと思っています。ぜひいろんなところの取組、うまく参考にしながら頑張ってもらいたいと思います。

教育長のお話も聞きながら思ったのは、不登校対策を考えると、これまでの教育についても、何か考えさせられるところが本当にあるなと思っています。もともと、閑谷学校が庶民の初めての学校だったというぐらいですから、もともと教育は、貴族とか本当に限られた階層の子どもしか受けられなかった、それも非常に濃密な、贅沢なこととして教育は始まった。世界中、特に先進国で教育が普及したのは軍隊のためですよね。しゃべった指示が分かんないから、国の都合で、底上げをするっていうことで始まりました。

でも本当は、通常の教育のところで、もうちょっとフォローしてあげて、不登校にならずに済むようにしてあげるのが本筋なんだろうなという感じはあります。よくある病気にさせておいて、病気になったら手厚くするよというよりも、病気にならないように健康指導するほうが本筋。当然、健康指導したって、けがする人も病気になる人もいるので、病院は要るんですけども、ただ病院に行かせないための工夫というのも、我々同時に、今でも考え

てるはずなんです。ちょっとそこが、つつい手薄になりがちなのかなというのは、これは、私が教育分野に配分する予算が足りないからそうなんだと言われると、本当にすみませんということなんですけれども、トータルの中で、我々どう資源配分をして、どういうふうに考えるのかということも含めて、不登校を生まない、不登校になった子どもが極力戻ってこられるように、総合的に考えなきゃいけないというふうに思っています。根深い問題ですけど、しっかり頑張っていきたいと思います。

あと、お一人、二人、これを聞いてさらにこう思ったみたいなことがあれば、ぜひお願いしたいと思います。

増えているというのは悔しいんですね。これだけ皆さん頑張ってくださっているのに、減ってもおかしくないんですけど、根深い問題があるんですね。何か、学校だけに任せているんじゃないかと、社会として、例えば経済界として、もしくは地域で、本当はこんな運動をするべきじゃないか、こういう協力を求めるべきじゃないかということが、何かありますか。学校だけで、大幅に減っているようには見えないんですね。

【教育委員】

居場所づくりというようなことと言えば、小学校、中学校というようなことでは、まだ課題が多いかもしれません。学校の中にも、登校していただけるような。

【伊原木知事】

まさにハッピールームがそういうことにつながって。

【教育委員】

そうですね。実社会も少し見えて、自分の将来も見えていくようなことに対して、企業側も協力する、できることをしていくとかですね。教育は、その子どもにとって、将来社会人になってもらうためにこういう対策をやっているのに、じゃあ不登校になって、まだそのことが解消できないお子さんなんかを、企業側もお預かりできるような仕組みをつくっていくようなこととか、何かそういう一緒になって取り組めるようなことがあればと思いますけど。

【伊原木知事】

何かこれだって決めてやらなくても、この学校はこれにちょっとかけてみる、この学校はこんなことやってみるといって、いろんなチャレンジ、取組をして、どれが効くのかというのは、我々試したいなという思いはあるんですね。何か、初期のコロナのような感じで、どうすればよくなるのか、何が薬なのか、何が原因なのか。当然、人によって違うっていうことなんです。でも、人によって違うにしても、何かグルーピングができるはずで、糖尿病と肺がんは違うみたいなので、病気という点では一緒でも、何らかの意味のあるグルーピ

ングとこういうタイプの人には大体これが効く、優しくするのがいい人、ちょっと厳しく言うほうがいい人とか、何かもう少しぐらい、どういうタイプの子だというのが分かって、似たようなタイプの子にはこれが効いたというのまで、今、「岡山型 長期欠席・不登校対策スタンダード」での7種類は、学校についていけない、いじめられた、何か気力が出ない、自分の体力の問題というような本当は、子どもの状態別に分かれていて、タイプ別にはなっていないように見えるんですよね。ざくっと原因別、タイプ別、それから状態別で、もう少し何かグルーピングができて、当然それが正しいかどうか、非A非B型肝炎と言ってたのがC型肝炎とそれ以外とか、少しずつ分かってくると、グルーピングもより精緻になってくるんだと思うんです。

いや、まだまだ我々、研究すべきことが多々ありますけれども、川上校長先生、非常に頑張られていて。こういうそれぞれの現場の努力を集めて、よりよい対策が取れるように、ぜひよろしくをお願いします。私としても、今、予算をつくっている最中ですので、及ばずながら、一丁目一番地で教育の方にできる限り予算をつけていきたいと思います。

今日は、本当にお忙しい中、お集まりいただきまして、どうもありがとうございました。